UIFA JAPON NEWSLETTER

No. 118 Apr. 25, 2021

Union Internationale des Femmes Architectes Japon　国際女性建築家会議　日本支部

■主な内容

・UIFA JAPON のこれからと UIFA について考える
・特集：コロナ禍での会員の日常（その３）
　自粛・多忙・多望
　我が家が消滅瀬戸際！コロナが襲った日常
　変わったこと / 変わらないこと / 変えたいこと
・惜別 東由美子さんのこと
・第２回 Web 交流会
　「中国のヴァナキュラー建築からパッシブデザインへ」
　吉野泰子会員の講演を視聴して

写真展「被災から 10 年―UIFA JAPON の見た岩泉町復興への歩み」ブーケ 21 における展示設営の様子　（写真：平野 正秀）

UIFA JAPON のこれからと UIFA について考える
Thinking about the Future of UIFA JAPON and UIFA

森田 美紀、伊藤 京子、岸本 裕子
MORITA Miki, ITO Kyoko, KISHIMOTO Hiroko

2019 年 12 月、フランス・パリにて、ド・ラ・トゥール UIFA 会長から UIFA JAPON 松川・正宗両相談役がうかがってきた内容をニューズレター 115 号に掲載しましたが、それから 1 年たつのを契機に、これからのことについて話し合ったことを整理しました。

ド・ラ・トゥール会長からのお話（115 号に掲載）

「100 歳も近くなり、事務的な諸手続きをすることができなくなってきた。いま考えられる選択肢は二つだけなので、これを手紙に書いてみんなの意見を聞く」

一つは、「これまで世界のみんなといろいろなことを一緒にやってきて本当に楽しかった、素敵だったと思う、これで UIFA をしまいにしようと思う」というもの。

もう一つは、「これまで楽しかったから、UIFA をしまいにしないで、UIFA の副会長である UIFA JAPON が引き受けてくれるならこれまでの資料を全部渡す」というもの。

まずは課題と方向性の議論を

これを受けて、2021 年 1 月 22 日の役員会では役員ひとりひとり意見を出し、それを整理し、まとめたものをもとに、2021 年 2 月 3 日、役員と広報等のメンバーが集まって、Zoom での意見交換を行いました。

結論が出たわけではないですが、共通しているのは、UIFA JAPON は今まで独自の活動を行ってきたし、今後もその活動は続けていくという意思。これは全員堅く持っていました。また、UIFA JAPON という名前も少しずつではあるが、認知されてきています。UIFA JAPON としての国内での活動も続けていくし、国際交流の活動も続けていく方向。会則に揚げられている UIFA JAPON の目的である「UIFA 活動への貢献」「海外組織との情報交換」「交流の促進と社会への貢献」「会員相互の交流と情報交換」のとおりです。

現在はコロナの影響もあり、活動そのものはしにくい状態ですが、Zoom というツールもあり、遠方の人、海外との交流もしやすくなってきています。

世界大会という発表の場はとても大事なことであり、素晴らしいことで、これは UIFA の特徴的な活動です。このような活動は続けていくべきですが、残念ながら 2015 年のアメリカヴァージニア大会以降開催されていません。なかなか世界大会を開催できる国は出てきませんが、WAT（台湾女建築家学会）という台湾の組織から世界大会を開きたいとの意向を聞いています。

UIFA と UIFA JAPON について

「ド・ラ・トゥール会長が、いつどのような方法で手紙を誰に出すかは分からないし、UIFA を引き継ぎたいという人 (国) がでてくるかもしれない。やはり日本が引き受けるべきだという結論になるかもしれませんが、それまで見守ろう。」今のところ、このような姿勢です。参加したみなさんが前向きに考え、今の状況を共有した有意義な話し合いでした。

これからに向けて

これらの議論を踏まえて、まずは、国際交流に熱意を持っている台湾の WAT を糸口に交流を続けていきたいと考えます。そして、本格的な行き来が可能となるまでは、オンラインでの交流会や、シンポジウムなどの可能性を探るという方向で、このためのチームを立ち上げました。今後、会員からのさらなる意見を集めて、交流先や内容などを検討していきましょう。

写真展　「被災から 10 年―UIFA JAPON の見た岩泉町復興への歩み」を開催
Photo Exhibition：10-year Reconstruction of Iwaizumi Town as Seen by UIFA JAPON

（広報・渉外委員会）

東日本大震災から 10 年目となることを受けて、UIFA JAPON では、この 10 年間の歩みを、住民でない私たちの眼で記録したものを展示し、岩泉を応援しようとこの写真展を企画しました。

2021 年 3 月 5 日～ 18 日の東京の中央区立女性センター「ブーケ 21」を皮切りに、盛岡、横浜での展示を企画し、その後もできるだけ多くの地域での巡回展示ができればと考えています。また、岩泉においても、一回り小型のパネルの巡回を進めています。巡回展示等の情報は、右の QR コードから検索してください。

このページの上部にはブーケ 21 での展示の様子を掲載します。

自粛・多忙・多望　小川 信子
Self-restraint/Busy/Hopeful　OGAWA Nobuko

WEB 講演会

新しい年を迎え、花の美しい春を迎えつつあるのに、気持ちを変化させる事が出来ない毎日です。この機会に積もり積もった書類を整理しようと思い、資料の束と取り組んでいました。この様な時、全く思いかけぬ機会が訪れました。

日本女子大学住居学科教授の定行まり子さんからの一報でした。日本総合住生活株式会社の代表取締役社長石渡廣一氏からの依頼で、小川信子は健在か？ということでした。そして大変久し振りに、講義をする機会を与えていただいたのです。それは、日本女子大と日本総合住生活株式会社と共催で、WEB 講演会を「住宅団地と暮らし―過去からニューノーマルの生活スタイルを学ぶ」というテーマで、2020 年 11 月 4 日に行いました。

このような課題での講義依頼の理由は、たいへん昔にさかのぼります。 それは、日本住宅公団（＊１）法の一部改正と株式会社団地サービス（＊２）誕生の時でした。私は、参考人として、第 38 回国会参議院建設委員会で、発言させていただいた記録があったのです。昭和 36 年 3 月 22 日のことでした。

その頃私は、女子大の研究室にいて卒業論文の調査対象地域であった戸山ハイツや、住宅公団の調査など行い、住民側からの希望や子供の生活環境の問題点など記録していた時でした。

これから将来をどのように構築していくか

国会の参考人として話す機会を与えていただいたのは、住民側の要求や、現状の問題点を調べていたことを住宅公団の方が知っていたためでした。

国会での発言が全部記録されていたのを読み、驚きました。 それで、今回の WEB 講演会の時にその当時の資料が必要となりました。 古い資料を破棄しようと思っていた私の手は、はた！と止まってしまいました。

91 年生きて来て、この頃は、時代の変化、流れについていけないと思っていましたら、これからの変化の方向を見すえる時は、昭和 30 年代の住宅公団の住環境の変化から、探ることがあるのではないかと、思われた方がおられたことに感慨ひとしおでした。

資料の中には、「女性と仕事の未来館」でまとめた“女性と建築展―仕事と家庭の両立支援する住まい、まちづくりに向けて―”がありました。（2009 年発行）。

現在、女性と社会的地位と活躍が問われていますが、環境計画を実現した先輩方の力に敬意を表すると共に、これから将来をどのように構築して行ったらよいか、様々な試行錯誤が必要となるでしょう。

＊１：現　UR 都市機構
＊２：現　日本総合住生活株式会社

小川信子による生活環境・すまい論（2013 年発行）

我が家が消滅瀬戸際！コロナが襲った日常　須永 俶子
During the Covid-19 Pandemic, My Family was on the Verge of Destruction　SUNAGA Yoshiko

突然訪れたコロナ感染

我が家は夫、私、そして身障の義弟の３人暮らし。昨年 10 月中旬、リハビリでデイサービスに通っていた弟を介し、介護していた我々家族にも感染が広がりました。定期の訪問診療の日、医師に一晩中咳の止まらない弟の症状を伝えると、血中酸素量が下がっているとのこと。コロナの可能性も考え、義弟がかかっている東京医科歯科大に交渉、搬送入院となりました。その後義弟のコロナ感染が判明したのです。病院から通知された保健所から、濃厚接触者の夫と私も 1 週間後に指定場所で PCR 検査を受けるように指示がありました。

どうなるか不明で、毎日体温を計りながら待つのは不安です。基礎疾患を持つ夫は日に日に熱が上がり、状態が悪化。我々は自力で別の病院の抗原検査を受け、感染が分かりました。このことを訪問医から保健所に連絡、やっと病院が見つかりました。

症状に応じて家族は分散

症状の重い夫はアビガンが使用できる都立済生会中央病院、私は隣区の同愛記念病院とそれぞれ保健所の車で入院。同行する保健所スタッフも感染予防の白装束に全身を包み、物々しいものでした。

夫も私も病院では個室。お互い状況を携帯でやり取りしました。数日後夫が意味不明なことを言いはじめ、変なＣメールを送ってきました。様子が分からず、夫の主治医に確かめても普段と変わらないとのこと。これを“せん妄”というのだそうで、病名になっていました。

私も看護師が接触を控えているので、自分で血圧、血中酸素、検温結果などを用紙に書き込み、小窓から外に掲示。除菌用のウエットテッシュでトイレの除菌、床の掃除なども行いました。朝昼夜の３食はドアの外、室内に持ち込んでいただきます。1 週間後、次の火曜日に退院とナースコールのやり取りだけで退院となりました。

最悪の事態を想像した親族

３日遅れて帰還した夫も、幸い今は普通に戻りました。退院の日、迎えに出た私の見た光景は本当に驚きでした。たかだか一週間くらいの入院でも、兄弟に支えられ、やっと歩く状態。病室で寝ていることはこんなにも体を衰えさせるのです。

機転を効かせて手配に動いた家庭医、その後も色々と相談できました。夜中電話を入れた夫の病院の主治医や看護師、「３人ともこの世から消えてしまったらどうしよう」と笑えない冗談を言いながら、我が家をみんなで分担し消毒、拭き清めてくれた兄弟や子ども達。皆さんに支えられ、我が家は持続可能となりました。

病院の窓から世の中の日常は何も変わらないのに…
左手遠くの屋根は国技館
手前が安田庭園

変わったこと／変わらないこと／変えたいこと　石川 和代
What's Changed, What Hasn't Changed, What Should Change　ISHIKAWA Kazuyo

変わったこと

国内で初めて新型コロナウイルス感染症の患者が確認されたのが 2020 年 1 月 15 日、集団感染が初めて確認されたダイヤモンド・プリンセス号の横浜港入港が同年 2 月 3 日、最初の緊急事態宣言発令は 4 月 7 日。この NEWSLETTER が発行される 4 月 25 日の 1 年前の私の体温は 35.2℃。でも、この原稿を書いている 1 年前、2020 年 2 月の体温は判らない。中国・武漢発の新たな感染症の集団感染がクルーズ船で発生していても、まだ毎日の検温が義務付けられていなかったからだ。

変わらない業務と日常

新型コロナウイルス感染症が拡大して、区役所の業務・日常はどう変わったのか？というお題をいただいた。

正直なところ、上記のような感染拡大防止対策が加わった以外、自分自身の日常はたいして変わっていない。正確には、変えられていない。

私が勤務する都市づくり部では、昨年のゴールデンウィーク中こそ登庁率 30% を目標とする出勤抑制を行って窓口業務も縮小したが、その後もコロナ禍は続き、一方、建築やまちづくりは着実に進めるべき性質の業務なので、業務量はコロナ以前とほぼ変わらない状況である。ただ、3 月 21 日まで延長された緊急事態宣言発令中の現在は、登庁率 70%を目標にした出勤抑制を行っており、これまで以上に業務のスケジュール管理が重要になってきている。

変えていきたい日常

私自身は、一番苦手なことの一つがスケジュール管理であり、部下をはじめ、上司、同僚、皆さんに迷惑をかけながら、助けてもらいながら、どうにか追いついていこうと努力の毎日だ。それでなくても昨年度から住宅課でマンション関係の各種支援事業を担当するとともに、新しい制度の運用開始や施策の取組方針の策定に関わっており、通常よりも業務量が増えている（と思われる）係である。コロナ禍でも頻繁に終電を逃し、休日も出勤しないと仕事が終らない（とはいえ、部下にはそんな無理はさせていないが）。

だが、本当に以前と変わりない仕事漬けの日常でいいのか。区役所でも「働き方改革」が叫ばれているうえ、夜間外出自粛要請を受け、残業も「やむを得ない場合を除き、20 時には帰宅できる時間まで」とのお触れも出ている。自分の生産性の低さも自覚している。それは進行管理の甘さの表れでもある。コロナ禍を契機として、時間の使い方をイロハから見直さなければと思うこの頃である。

各課職員手づくりの飛沫感染防止用のスクリーン。廊下向かい側の課は衝立式、当課は天井取付のビニールカーテン式。材料は区支給

訃報

惜別　東 由美子さんのこと　渡邉 喜代美
Mourning Ms.Yumiko HIGASHI　WATANABE Kiyomi

（写真：大澤 未来）

東さんは、UIFA JAPON 初動期から参加してきた人だ。

1963 年、ド・ラ・トゥールさんが世界の女性建築家とその関連の職業に携わる全女性に呼びかけ、パリに本部を設立、組織された UIFA はレベルの高い意志を示した。①女性建築家の社会的認知と地位の確立 ②女性建築家の仕事の確保 ③世界の女性建築家及び、関連する分野の職業に従事している女性相互の情報交換と情報収集 ④会員間の交流及び親睦 ⑤あらゆる政治・人種・宗教に関係なく平等・相互扶助などであった。

この志に共感して参加したであろう東さんは、UIFA JAPON 初動期から参加してきた。

1992 年、ニュースレター 1 号では UIFA JAPON 第 1 回役員会が 10 月に開かれ、役員の任務分担が以下のように決められ、名誉会長ド・ラ・トゥール、会長中原暢子、副会長小川信子、会計監査安藤怜子、総務担当松川淳子、事業担当山田規矩子、広報渉外担当飯島静江、会計担当東由美子と記録されている。

東さんはここから始まる創設メンバーのひとりであった。

国際会議への参加も多く、1996 年ブダペスト（ハンガリー）会議では、ハンガリーの国会議事堂が開放され、そこで会議や交流をした記憶は忘れないが、東さんも議事堂壇上にいて小さな体が大きく見えた憶えがある。そのハンガリー国会議事堂は首都ブダペストのドナウ川岸辺にあって世界で三番目に大きな美しい国会議事堂である。

1998 年 9 月、UIFA 第 12 回日本大会は、“ 環境共生時代の人・建築 都市 － 21 世紀における新しい調和的関係を模索しながら ” － 世界中から集まった住宅・建築・都市や地域の環境の創造と研究に携わる女性たちが、楽しく、かつ真剣に議論が交わされた。

この時も舞台裏を支えた主要メンバーであった。

広報誌への寄稿も多く見られ、なかでもクロアチアの UIFA のメンバーのセナ・セクリックさんの著書「建築の理論と実践における女性の歴史」の紹介。古今東西の世界中の女性が関わった建築に関する仕事を、神話の時代からさかのぼって取り上げたものだ。セナは 2003 年亡くなられたが、「この指止まれ」企画「セナさんの本を読む会」として、東さんが呼びかけ、集まった 6 人のメンバーによって翻訳が完成。これを 2005 年総会で報告したりなど活動も広かった。

さようなら東さん。はきはきと話をなさる姿は今も印象に残っています。

UIFA JAPON 第一回総会　前列右端に東 由美子さん、背面に筆者　（写真提供：松川 淳子）

No. 118 Apr. 25, 2021

Union Internationale des Femmes Architectes Japon

UIFA JAPON 事務局
〒 102-0083
東京都千代田区麹町 2-5-4
第 2 押田ビル ㈱生活構造研究所内
Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866
E-mail: uifa@liql.co.jp
URL: http://uifa-japon.com
発行 2021 年 4 月 25 日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON
c/o LABORATORY FOR INNOVATORS
OF QUARITY OF LIFE
DAINI-OSHIDA BLDG.
2-5-4, KOUJIMACHI,CHIYODA-KU
TOKYO, JAPAN 〒102-0083
PHONE :+81-3-5275-7861
FAX :+81-3-5275-7866
URL :http://uifa-japon.com

第 2 回 Web 交流会 2021 年 2 月 5 日 2nd Web Exchange Meeting

「中国のヴァナキュラー建築からパッシブデザインへ」吉野 泰子会員の講演を視聴して

上條 千恵子

From the Vernacular Architecture of China to Passive Design

KAMIJO Chieko

UIFA JAPON 第 2 回 Web 交流会は with コロナになった新時代にふさわしく、タイトルも「中国のヴァナキュラー建築からパッシブデザインへ」と過去から未来へ繋がる新発想の提案が凝縮されている内容だった。終わってからの質疑ではパッシブデザインの利用法やこれからの都市環境について議論がなされた。

今回は中国少数民族が在住する西部地区をメインに話が進められた。

各地域のヴァナキュラー建築

まずは陝西省の窰洞（やおとん）を開発したニューヤオトンの紹介からで、従来の窰洞の様な内部へ土を掘削する形式ではなく、天井に土を盛り玄関前面に植樹、地下にはクールチューブを設け、建物奥から光と熱を循環させる設計を施し現在ではホテルとして活用されている。

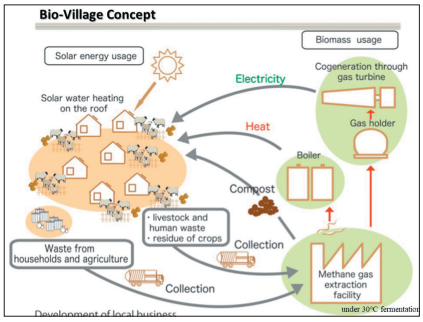
次に寒冷地域にあたる内モンゴルの断熱性能を高めた住宅研究、チベットでは乾燥している環境を生かして牛の糞を乾燥して燃料にしたバイオマス生活住宅や、伝統民居や集合住宅の熱環境問題を改善させる提案が紹介された。

厳寒地域新疆ウイグル自治区トルファンでは風力発電や乾燥した土地を生かした干しぶどう建築、イスラム地域の影響を受けた民族や建物が紹介された。さらに常春の温暖地域にある雲南省では竹を駆使した建築群や少数民族の色鮮やかな民族衣装が印象的であった。

中国大陸各地域の伝統建築切手と気候分布図

バイオビレッジ構想

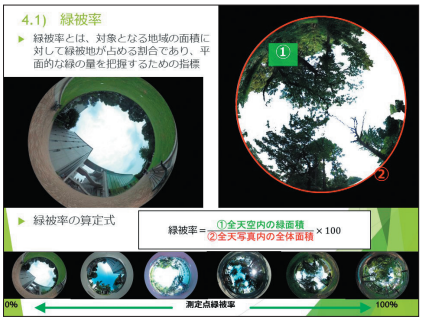
さらに中国粛南ユグル族自治県における居住環境では家畜である羊や人間の糞尿のバイオマスとソーラーウォーターシステムのエネルギーを生かした住宅、村構想を日中間で共同研究した。こうした中国での研究は留学生や教授を日本へ招聘し、日本における都市環境問題にも応用される事となった。



太陽光温水パネルと糞尿のバイオマスを熱源とするバイオビレッジ構想

天空緑被率

環境大臣小池百合子氏がクールビズを推奨していた当時、板橋区小学校では緑のカーテンの環境教育や市内を 500㎡に区切っての緑化地域の研究など地球環境時代における住環境教育の普及・啓発について研究された。さらに魚眼レンズを使っての樹木量計測、打ち水による温熱負荷の調査、屋外の温熱環境シュミレーションを行った。そして研究から導かれた環境問題を駆使した建築デザイン所謂パッシブデザインを提案し、ライオンズマンションの標準装備となった。最後に熱中症予防に向けた緑化計画の指標として天空緑被率約 45% 以上の植樹を提案し未来に向けた提案とした。



天空緑被率の指標は 45% 以上

吉野さんの穏やかで軽妙な声が心地よく悠久の中国旅行をガイドされているかの感覚もある一方で、過酷な環境だったと思える中国での研究を緻密かつ客観的数値により評価を行い、現代日本の抱える環境問題を数値で裏付け提案されたのには敬服の念に耐えない。UIFA JAPON にふさわしい重厚で貴重な発表であり今後のアジア交流へも繋がる事を期待したい。

■役員会報告

2020 年度第 5 回 1 月 22 日 オンライン会議 写真展を中央区立女性センターで開催準備 総会の方針検討 「UIFA の継承について」の話し合い 会費支払い状況報告 元会員東由美子さん訃報 NL117 号発送・118 号企画報告

2020 年度第 6 回 3 月 5 日オンライン会議 総会について、オンラインで開催か 記念講演について審議 写真展「被災から 10 年－ UIFA JAPON の見た岩泉町復興への歩み」中央区立女性センターにて開催（3/5 ～ 3/18）報告、岩手、横浜を巡回する予定 埼玉他巡回展計画 2/5 第 2 回 Web 交流会報告 「UIFA の継承・UIFA JAPON の今後について」の話し合い報告 NL118 号進捗報告

■編集後記

コロナ自粛からもう 1 年。あの震災からやっと 10 年（薄井）／“女性の働きやすさ”日本はワースト 2 位！ 29 か国中 28 番目！！皆さん改革はいかが？（渡邉）／いつになく咲き競いあう赤椿とともに追悼の日を迎えた（井出）／春めいた今日この頃、東日本大震災からの 10 年を振り返る（宮本）／ヴァナキュラー建築のお話から、改めてまちの緑や住まいの工夫の必要性を痛感（牛山）／春風は、遍く宇宙を満たす。コロナの殻から出て、深呼吸！（御船）／建築士の仕事も変化への対応力を試されているように思う（編集長 杉原）